

三澤勝衛の記録 国際的に光

14年間続けた太陽黒点の観測

計測指標の改定に反映へ

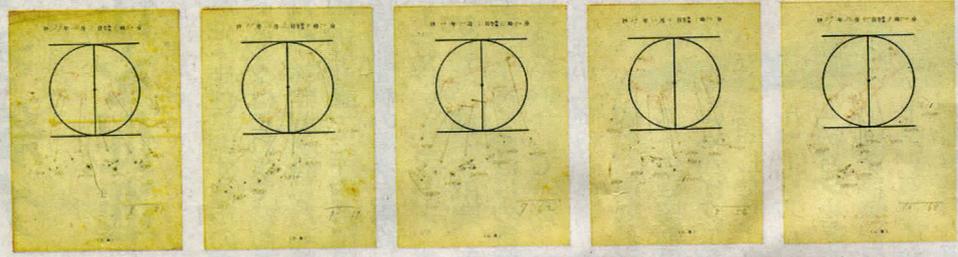
旧制諏訪中学校（現諏訪清陵高校）で教壇に立った三澤勝衛（1885～1937年）が1921年から14年間続けた太陽黒点の観測記録が、太陽活動の長期変動を理解するための計測指標（国際太陽黒点相対数）の改良に役立つ重要なものと世界的に認められ、国際チームが現在進める指標の改定に反映されることになった。世界大戦中の観測の不足を埋めて、指標のゆらぎを補正する作業の参照データとなる。諏訪清陵高と同高窓会が保管する三澤の記録をひもとき、データ提供の基礎を作った「長野県は宇宙県」連絡協議会と、国際チームに参画し、光を当てた名古屋大高等研究院特任助教の早川尚志さんが5日、オンラインで公表した。

（日比野真由美） 15面に関連記事



100年目にして初めて科学的な評価

三澤が14年間、ほぼ毎日観測を続けた記録（諏訪清陵高校三澤勝衛先生記念文庫提供）



同協議会の大西浩次会長によると、太陽の黒点の数や状態の観察は400年の世界観測史でもっとも古く、黒点の活動が磁気嵐の強弱と連動し、地球上の電波に大きな影響を与えるとして特に注視される。世界的な観測は1人の基幹観測者が情報を集約してデータを蓄積しているが、観測者や用いる望遠鏡が変わった際、データに少なからず食い違いが生じるのが課題という。特に1925～1928年の4年間は観測回数もデータ原本の保管も少なく、指標の改定にあまり頼る記録が求められていた。

早川さんは「日本で初めて体系的に何年も1人で太陽黒点観測を行った」三澤の記録に注目。同協議会が学芸員や市井の天文愛好家らを巻き込んで三澤のデータを検討し、長期安定性を確認、デジタルデータ化した。協議会には茅野市の八ヶ岳総合博物館や伊

早川さんは三澤の記録の有用性を論文にし、今月の英国王立天文学月報誌で発表する。大西会長は「三澤さんは白内障で観測を断念する際、無念の中で『自身の記録が国際的に役立つのでは』との思い

して初めて科学的に評価され、宇宙県にとっても初の科学的な成果」と喜び、「長年問題となっていたゆらぎの解決の突破口になった。計測指標は過去のデータをつなぎ、未来を予測する基本になる」

と期待を込めた。早川さんは「三澤の記録を保管し続けたからこそ」と諏訪清陵高生の努力も高く評価した。指標の改定には三澤の志を継いで70年間観測した諏訪市在住の藤森賢一さん(89)のデータも採用されている。